大阪府埋蔵文化財調査報告2010－6

中 野 北 遺 跡 Ⅱ

― 主要地方道美原太子線道路整備工事に伴う発掘調査 ―

大 阪 府 教 育 委 員 会

中 野 北 遺 跡 Ⅱ

― 主要地方道美原太子線道路整備工事に伴う発掘調査 ―

大 阪 府 教 育 委 員 会

序　　文

中野北遺跡は、富田林市中野町・粟ヶ池町にある、旧石器時代から中世に至る複合遺跡です。現在までの発掘調査で、弥生時代の土坑や古墳時代の方墳、奈良時代の溝、中世の柱穴などが多数検出されています。

大阪府教育委員会では、主要地方道美原太子線道路整備工事に先立ちまして、平成21年度に発掘調査を実施しました。その結果、粟ヶ池の東堤の下から、中世の溝跡などの遺構が検出され、須恵器や土師器・黒色土器などの遺物が出土しました。これらの遺構・遺物は、『日本書紀』に登場する「和珥池（わにいけ）」との説もある粟ヶ池の築造・改修の歴史を解明していく上で、かけがえのない貴重な資料となるものと確信されます。

最後に、発掘調査の実施にご協力いただきました地元の皆様、ならびに関係機関に深く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年１月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　野　口　雅　昭

例　　言

1．本書は、主要地方道美原太子線道路整備工事に伴い実施した富田林市粟ヶ池町地内他に所在する中野北遺跡の発掘調査報告書である。
2．本調査は、大阪府都市整備部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。
3．現地調査は、調査第二グループ副主査　山田隆一を担当者として、平成21年度に実施した。整理作業は平成22年度に、調査管理グループ副主査　藤田道子を担当者として実施した。
4．本調査の調査番号は、０９０４２である。
5．本調査の写真測量は、株式会社ジオテクノ関西に委託した。撮影フィルムは、同社で保管している。
6．出土した遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
7．発掘調査および整理作業にあたっては、地元自治会、富田林市教育委員会、大阪府富田林土木事務所の御協力を得た。
8．本調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
9．本書の執筆・編集は、山田が行った。
10．発掘調査、遺物整理および本書の作成に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
11．本書は300部作成し、一冊あたりの印刷単価は452円である。

凡　　例

1．本書に用いた標高は、東京湾標準潮位（T.P.値）による。座標値は、世界測地系平面直角座標第Ⅵ系によるもので、方位は座標北を示す。
2．土層の記載に用いた色調は、『新版　標準土色帖（23版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）2001．1によった。

本文目次

はしがき
例　　言
凡　　例
第１章　調査にいたる経緯と経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
第３章　調査成果 …… 4
　第１節　堤の調査 …… 5
　第２節　その他の遺構と遺物 ……13
第４章　橋梁部の確認調査 ……14
第５章　まとめ ……16

挿図目次

第 1 図　調査区位置図（昭和７年仮製地図） …… 1
第 2 図　周辺の遺跡分布図 …… 3
第 3 図　調査区位置図 …… 4
第 4 図　堤４平面図 …… 5
第 5 図　南壁土層断面図（堤の横断面） …… 7 ～ 8
第 6 図　東壁土層断面図（堤の縦断面） …… 9 ～10
第 7 図　堤関連の出土遺物実測図 ……12
第 8 図　溝５平面図 ……13
第 9 図　溝５出土遺物実測図 ……13
第 10 図　粟ヶ池橋脚部分の土層断面柱状図 ……14
第 11 図　埋没微低地の復元図 ……15

写真図版目次

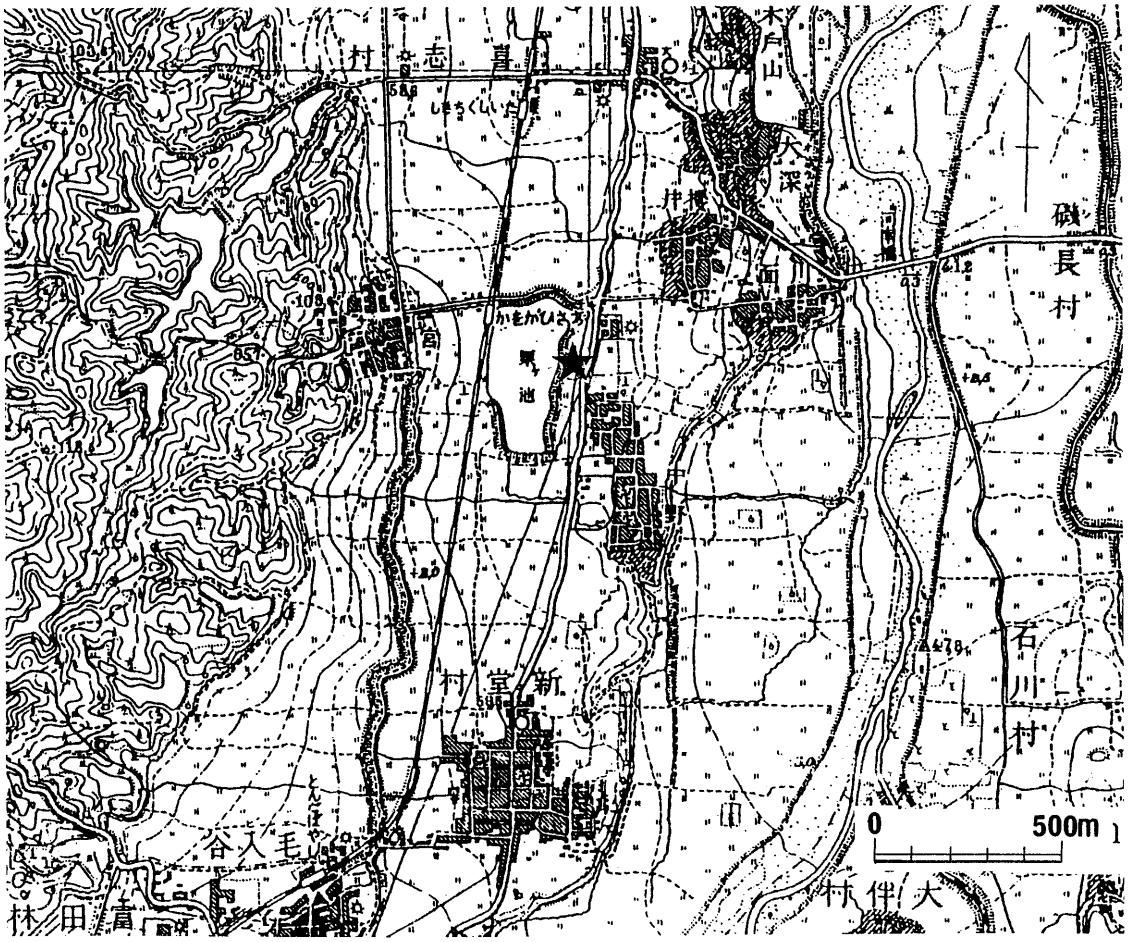
図版１　調査地遠景　　上．東上空から見た調査地（平成16年撮影）
　　下．北上空から見た調査地（平成16年撮影）
図版２　堤南壁断面　　上．堤１・２・３の上半断面（北東から）
　　中．堤３の上半断面（北から）
　　下．堤２の下半断面（北から）
図版３　堤４検出状況　上．堤４の全景（西から）
　　中．堤４の全景（北から）
　　下．堤４の全景（南から）
図版４　堤４断面　　上．堤４の南壁断面（北西から）
　　中．堤４の南壁断面（北から）
　　下．溝１・２・３の東壁断面（西から）
図版５　下層遺構　　上．溝５の掘削状況（北西から）
　　中．溝５の南壁断面（北から）
　　下．溝６・７の確認状況（西から）
図版６　出土遺物　　上．堤・下層遺構関連遺物
　　下．堤関連遺物

第１章　調査にいたる経緯と経過

本発掘調査は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部から依頼を受けて、実施したものであり、平成22年１月18日に着手し、平成22年２月26日に終了した。

調査原因は、主要地方道美原太子線道路整備工事であり、一般国道（旧）170号線から粟ヶ池をまたいで、一般国道170号線（大阪外環状線）までの区間に道路を新設する工事である。工事の実施に先立って、事業主体である大阪府富田林土木事務所と大阪府教育委員会文化財保護課は、埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行った。

一般国道（旧）170号線から今回の調査地にいたる約40ｍの間は、平成16年度に発掘調査がなされ、７世紀代の埋没古墳を確認するなど多大な成果があった（第３図参照）。そして、その報告書は平成17年度に『中野北遺跡』（大阪府埋蔵文化財調査報告2004－6）として刊行されている。今回の調査地は、平成16年度調査地の西側隣接地、富田林市粟ヶ池町地内他であり、調査面積は180㎡である。粟ヶ池東側の堤中央部の南北の長さ約16ｍ分であり、幅は場所によって若干異なるが東西12～13ｍである。



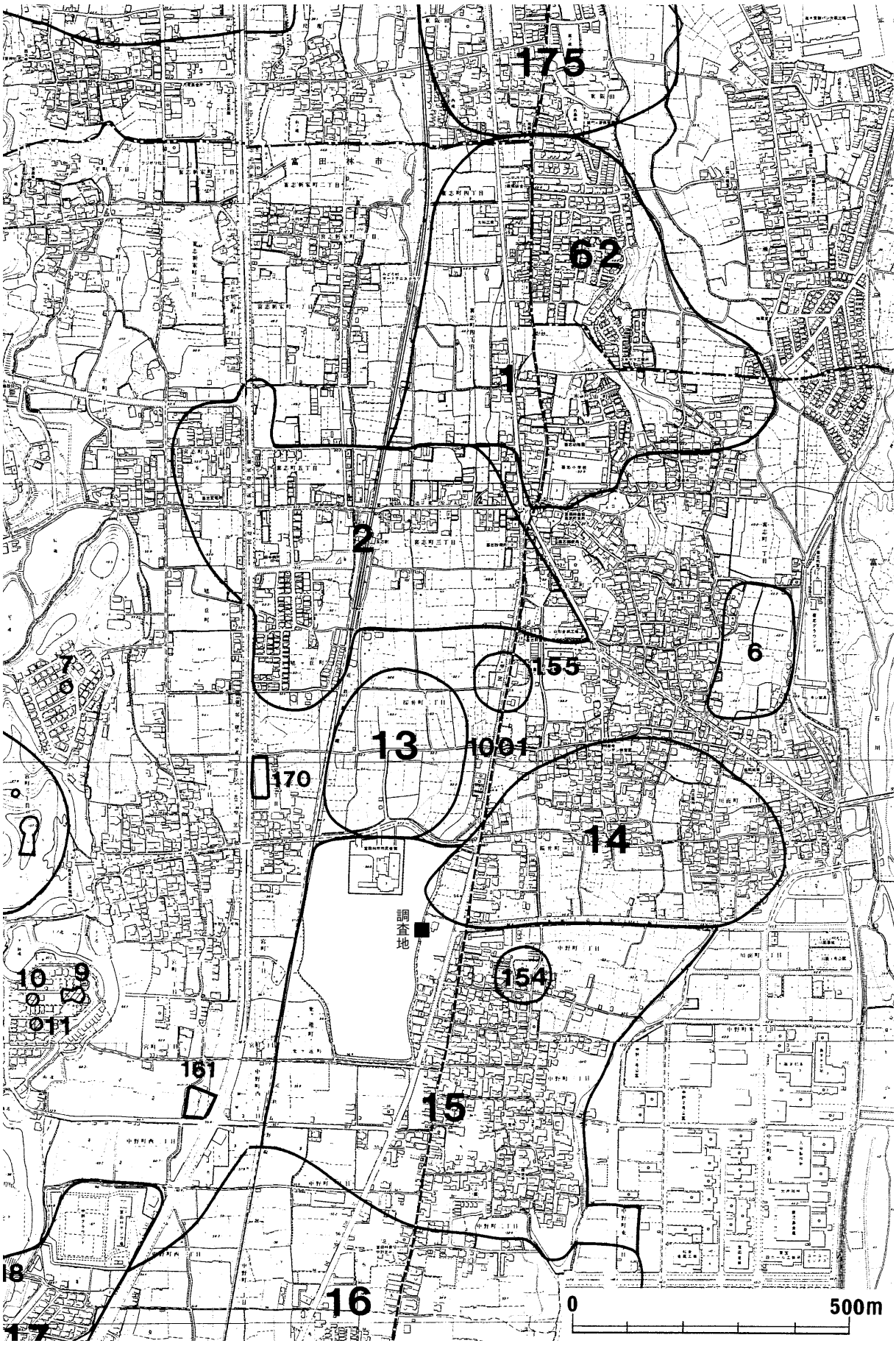
第１図　調査区位置図（昭和７年仮製地図）

第２章　位置と環境

中野北遺跡は、大阪府富田林市中野町と粟ヶ池町に所在する。地理的には、遺跡は北流する石川によって、その西岸に形成された中位相当の河岸段丘上にある。この河岸段丘の縁辺に沿って集落が形成され、それらの集落を東高野街道が南北にむすぶが、本遺跡においても街道はその中央部の最高所を走る。周囲の土地利用は近年にいたるまで水田・畑と宅地であるが、中野北遺跡はこの東高野街道を挟んで東と西では土地利用のあり方が大きく異なる。巨視的に見れば、街道を挟んで西方は元々が谷地形でありそれを利用して築造された粟ヶ池、一方地形の高い東方は宅地が広がっており、中野北遺跡とはこの両者を取り込むものである。なお遺跡分布図では、南方に中野遺跡が接して存在するが、両遺跡の間には北西から南東方向に開く谷地形があって、地形的に分断されている。

粟ヶ池は石川の上流で取水された水をためる、石川流域最大のため池である。面積は約8ha、水深は３～４ｍ程度で、６箇所に樋があり北方の約60haの水田を灌漑している。ところで近年に至るまで粟ヶ池に関する文献史料は存在しないのだが、『日本書紀』仁徳天皇13年10月条の「冬十月、和珥池を造る、」の「和珥池」とする説がある。

『河内名所図会』（秋里籬島が享和元年（1801）に刊行、柳原書店が平成２年に活字翻刻）には、「粟が池　同村にあり。むかし、聖武帝御時、掘らさせ給ふとなん。」「和爾池　貴志村にあり。広サ九百畝。」と記載し、その後に前述の『日本書紀』の記事を引用している。さらに続けて「美具久留御魂神社　喜志村和爾ノ池の西にあり。一名、和爾神社。云々。」と記載する。「和爾」は「和珥」に通じる。当時「粟が池」と「和爾池」があったことになるが、このことは地元では、現在の粟ヶ池はその中には堤があって別個の二つの池であり、一方が和爾池と呼ばれていたとされていることに対応するのかもしれない。ただしこの和爾池が、『日本書紀』の和珥池なのかは未解決である。



1．喜志遺跡　2．喜志西遺跡　6．喜志南遺跡　7．鍋塚古墳　9．真名井古墳　10．宮前山古墳１号墳
11．宮前山古墳２号墳　13．粟ヶ池遺跡　14．桜井遺跡　15．中野北遺跡　16．中野遺跡　17．新堂廃寺
154．喜志城跡　155．桜井北遺跡　161．中野西遺跡　170．粟ヶ池西遺跡　175．東阪田遺跡　1001．東高野街道

第２図　周辺の遺跡分布図

第３章　調査成果

東側隣接地における平成16年度発掘調査では、２層の遺物包含層と、それを除去して標高54.5m程度で遺構面１面が確認されている。２層の遺物包含層とは、②層（厚さ10～15cm、古代末～中世）と③層（厚さ17cm、奈良時代）と報告されている。本来はこの遺物包含層の直上までを重機で掘削し、その後に人力掘削の工程に入るのであるが、今回の調査地は粟ヶ池の東堤に相当するので、堤盛土の形成過程も調査対象とした。そこで重機での掘削は、調査区南に断面観察用の壁を残しつつ行い、断面調査が終了した後にそれを除去して完了する工程で行った。

その結果、予想以上に堤盛土の残存状況が良好で、堤の形成過程も明瞭であることが判明するとともに、平成16年度発掘調査の遺物包含層は存在しておらず、また遺構面は急激に西に向かって傾斜して東側2.5～3.0ｍで途切れ、それ以西はその下部の礫層のみになることも確認できた。そこで最古段階の堤（堤４）の平面調査を行い、その後に堤盛土を除去して遺構面の調査を行った。なお、堤を露出させた段階で、クレーンによる写真測量を行った。

第３図　調査区位置図

第１節　堤の調査

当初の重機での掘削終了段階で、堤盛土が良好に残存するとともに、その盛土の土質の違いから大きく４段階程度の堤が識別できた。最初の堤は地山が西方に低くなりはじめる傾斜変換部分に築造されており、その後の堤は池の内側に土盛りすることで改修するものである。発掘調査では新しい段階の堤から、堤１～４と遺構名を付して行った。また各段階の堤の中にも数度の土盛り、あるいは改修の段階があることも確認できるものがあり、その場合も新しい段階から、例えば堤４では、堤４－１、堤４－２、堤４－３と記載した。

また今回の発掘調査では、堤を横断して掘削された溝が確認された。機能は、堤の東側隣接地に存在したであろう水田・畑などの生産域から、あるいはそこに水を供給する水路からの余水を池に流し込むことが目的であろう。溝２・３は堤４に伴うが、溝１は堤３・２・１に伴うものが重複し、詳細は不明瞭である。よって、溝２・３は堤４の報告の中で記載するが、溝1は最後に記載する。

なお堤３盛土の途中までは、重機によって掘削し、それ以降は人力によって掘削を行った。

堤４　第５図南壁土層断面の東側隣接地は、平成16年度発掘調査地であり、そこでの遺構検出面である地山面はT. P. 54.36～54.40m程度である。遺構を検出するのに、その表面は幾分削り込むので、平成16年度発掘調査地の遺構面（地山面）は第５図の地山（63層）のT. P. 54.45mに大変

第４図　堤４平面図

近いと考えられる。また63層は西方に向かって急激に低くなっているので、今回の調査地東端がまさに傾斜変換点に相当しており、堤４はその傾斜変換点をまたいで築造されていることが確認できる。詳細に見れば、堤４の東半分は地山面上、西半分は流れ込みによる堆積砂（55層）上に築造されている。

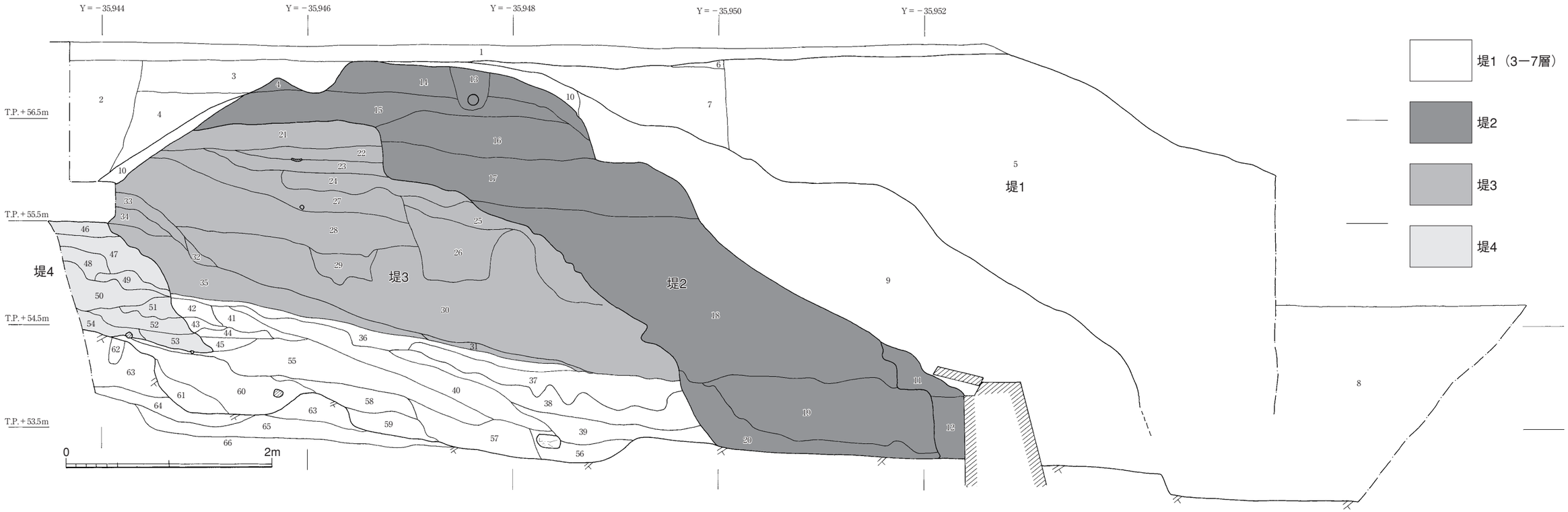
堤４に少なくとも３回の土盛りのあったことは、東壁横断面（第６図）で確認できた溝３と溝２の掘り込み面を検討すれば明らかになる。すなわち、溝３の段階（堤４－３）が最も古く、次に溝２の段階（堤４－２）、横断する溝がないか、あるいは調査範囲外に移動した段階（堤４－１）の３段階である。堤４－１と堤４－２は、土質もまったく異なる。南壁縦断面（第５図）では、堤４－２が灰色系を呈する粘土（50・52層）を主とするに対して、堤４－１が黄褐色系を呈する粘質土（46層～49層）を盛土にしている。

溝３　最古の堤４－３段階を横断する溝である。断面は上半分で大きく開く「凹」形を呈し、規模は底幅0.7m、深さ1.15m程度で、地山を深く掘削している。埋土は３層からなり、下層39層は粘土ブロックを含む崩落土、中層38層はラミナを形成するシルト・砂・粗砂、上層37層は粘土ブロックと礫を多量に含む人為的な埋立て土である。なお中層ラミナの堆積方向は、東方から西方である。遺物は、中層からは瓦器高台の細片１点が出土したのみである。かさ上げして築造した堤４－２段階には、機能は溝２に引き継がれると考えられる。

溝２　堤４－２段階を横断する溝である。断面は大きく開く「∪」字形を呈し、規模は幅3.0m、深さ1.5m程度で、地山を深く掘削している。埋土は大きく３分類できるが、数段階の流水で形成されたものである。下層の26層は崩落土であり、中層はラミナを形成する砂・粗砂（25層）　⇒　崩落土（24層）　⇒　ラミナを形成する粘土・砂・粗砂・小礫（23層）と流水状況を示す。このラミナの堆積方向は、東方から西方である。上層22・21層の上半は、両側から薄く粘土層が流れ込む状況を呈し流水による自然堆積である。遺物は、土師器細片４点が出土しているが、時期の詳細は不明である。なお最終段階の堤４－３を横断する溝は、調査範囲には確認できない。

堤３　盛土は、褐灰色～灰褐色、青灰色系を呈する粘土で、いずれも非常に硬く締まる。また若干の小礫を含む層が目立つが、その含有量は堤１・２・４と比べると大変少ない。非常に良質な粘土ながら、盛土内への瓦や陶磁器の破損品の投棄が目立つ。堤４の池の内側に数段階の盛土が確認でき、土盛りを繰り返すことによって、最終的（堤３－１）に高さ１m程度のかさ上げとなり、大きな堤に変貌している。

堤３にも複数回の土盛りがなされたと考えられる。縦断面（第５図）の33・34層は、黄褐色系の粘質土であり、本層を上面とする段階（堤３－２）が想定できる。このことは、本段階の堤上面は縦断面ではT. P. 55.80mであり、横断面（第６図）でもT. P. 54.50～56.10mの間に同じ色調と土質の４・５・９層が連続することからも追認できる。また堤３－２より上部でも、土質の違いや土坑・犬走り状の平坦面などから複数の段階が想定できるが、これらの土層は横断面には現れないこともあって、確証が得られない。よってここでは、堤３－１として一括する。



堤1
1．小礫層（遊歩道舗装）
2．灰褐色（7.5YR4/2）土
3．黒褐色（7.5YR3/1）粘質土
4．橙色（7.5YR6/6）粘質土
5．黄褐色（10YR5/6）粘土ブロック（7層崩壊土）と褐灰色（10YR5/1）土に多くの礫、コンクリート片、瓦片が混在
6．褐灰色（7.5YR5/1）土
7．橙色（7.5YR6/6）小礫混じり粘土

8．黒褐色（2.5Y3/1）礫混じり粘質土、暗灰色（N3/）粘土ブロック、灰白色（N7/）粘土ブロックに礫、コンクリート片、コンクリート擁壁材、空き缶が混在
9．黄褐色（10YR5/6）粘土ブロック（堤2崩壊土）、黒褐色（2.5Y3/1）礫混じり粘質土、暗灰色（N3/）粘土ブロック、灰白色（N7/）粘土ブロックに礫、コンクリート片、コンクリート擁壁材が混在
10．黒褐色（7.5YR3/1）粘質土
11．明黄褐色（2.5YR6/8）粗砂・小礫混じり土ブロックと青灰色（5B5/1）粘質シルトブロックが混在
12．明黄褐色（10YR6/8）砂礫土に、褐灰色（10YR5/1）粗砂・小礫混じり粘土ブロックが混在

堤2
13．にぶい褐色（7.5YR5/1）砂・小礫混じり粘質土
14．にぶい橙色（7.5YR5/1）砂・小礫混じり粘質土ブロック
15．褐色（7.5YR4/3）小礫混じり粘土、黒褐色（10YR3/1）粘土ブロック、にぶい橙色（7.5YR5/1）粘質土ブロックが混在
16．橙色（7.5YR6/6）粘土ブロック
17．明褐色（7.5YR4/2）粘土ブロックに褐灰色（10YR4/1）腐植土薄層が介在
18．明黄褐色（10YR6/8）粗砂・小礫混じり土に褐灰色（10YR4/1）腐植土薄層が介在
19．明黄褐色（10YR6/8）粗砂・小礫混じり土に褐灰色（10YR4/1）腐植土ブロック、灰白色（7.5YR8/1）粘土ブロックが混在、固く締る
20．黒褐色（2.5YR3/1）粘土ブロックと黄褐色（2.5YR5/4）砂礫ブロックが混在する崩落土

21．褐灰色（7.5YR5/1）小礫混じり粘土
22．灰褐色（7.5YR5/2）小礫混じり粘土

堤3
23．褐灰色（7.5YR6/1）粘土
24．灰褐色（7.5YR5/2）小礫混じり粘土ブロック
25．褐灰色（7.5YR5/1）粘土
26．褐灰色（7.5YR6/1）粘質土に褐灰色（7.5YR4/1）粘土ブロックが混在
27．褐灰色（7.5YR6/2）粘土
28．褐灰色（7.5YR6/1）粘土に明褐灰色（7.5YR7/1）粘土ブロックが混在
29．褐灰色（10YR6/1）粘土に青灰色（5B6/1）粘土ブロック、多量の砂礫が混在
30．青灰色（5B6/1）粘土
31．青灰色（5B6/1）粗砂・小礫混じり粘土
32．灰褐色（10YR6/2）粗砂混じり粘土
33．にぶい褐色（7.5YR6/3）粘質土
34．明黄褐色（10YR6/2）粘土に暗褐色（10YR3/4）粒が入る
35．緑灰色（10G6/1）粗砂混じり粘土

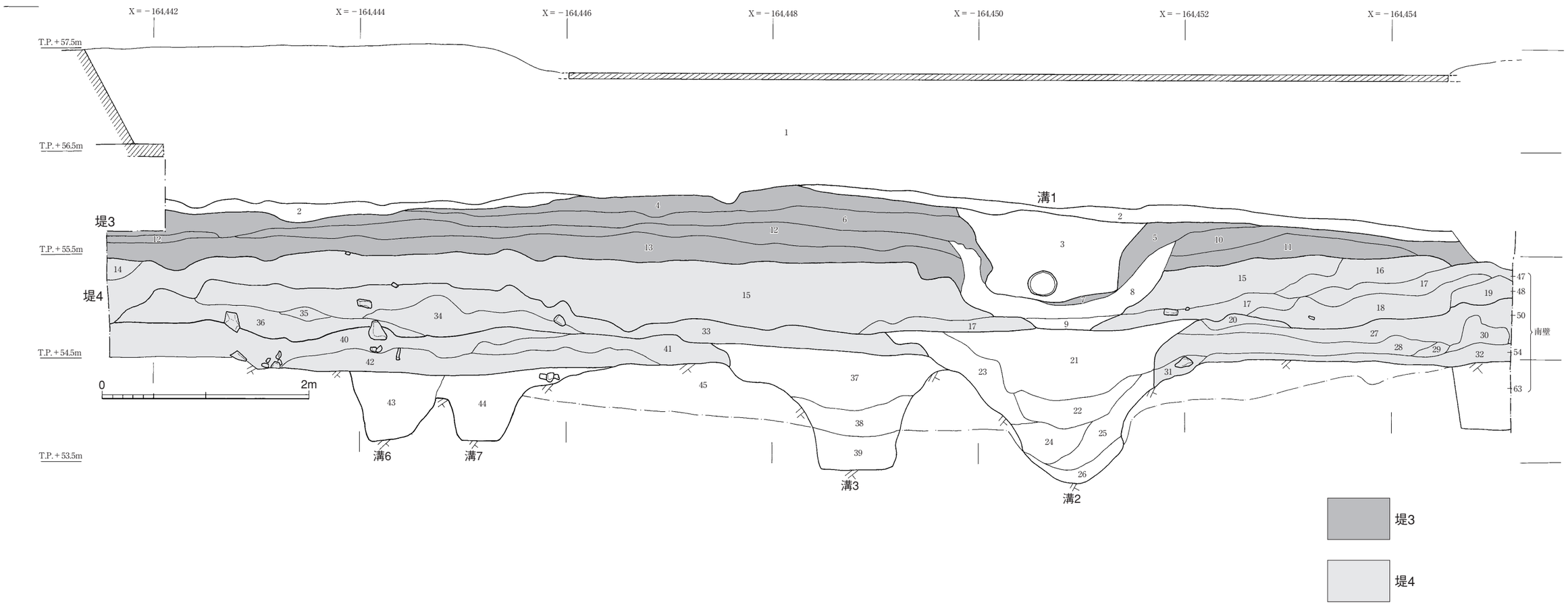
36．灰色（5Y5/1）小礫混じり粗砂
37．青灰色（7.5YR4/2）粘土ブロックに礫（1～5cm）混じる
38．緑灰色（7.5GY5/1）粘土
39．緑灰色（10G5/1）粘質シルトに薄い炭層が介在、ラミナを形成
40．灰色（5Y5/1）粗砂・小礫混じり粘土
41．黄褐色（2.5Y5/6）粗砂・小礫混じり粘質土
42．灰色（5Y6/1）砂・小礫層に黄灰色（2.5Y6/1）粘土ブロック（2～5cm）が多く混在
43．黄灰色（2.5Y6/1）砂層に黄灰色（2.5Y6/1）粘土ブロック（0.5～3cm）が多く混在
44．黄褐色（2.5Y5/1）粗砂・小礫混じり粘土
45．オリーブ灰色（10Y6/2）粗砂・小礫

46．明黄褐色（10YR6/8）粗砂・小礫混じり粘質土に褐灰色（10YR6/1）粘土ブロック（1～3cm）が多く混在
47．褐灰色（7.5YR6/1）粗砂・小礫混じり粘土に明褐色（7.5YR5/8）粗砂・小礫混じり粘質土ブロック（1～3cm）が混在
48．褐灰色（7.5YR6/1）粗砂・小礫混じり粘土ブロック（1～4cm）が混在

堤4
49．明黄褐色（10YR6/8）粗砂・小礫混じり粘質土
50．灰色（10Y6/1）粗砂・小礫混じり粘土に灰色（5Y4/1）砂混じり粘土ブロック（1～3cm）が混在
51．明黄褐色（10YR6/6）粗砂・小礫を多量に含む粘質土に褐灰色（10YR6/1）粘土ブロック（1～4cm）が混在
52．灰色（10Y5/1）粗砂・小礫混じり粘土
53．灰色（10Y6/1）粗砂混じり粘土に灰色（5Y4/1）粗砂・小礫が混在
54．オリーブ色（5Y5/4）砂混じり粘土に灰色（5Y5/1）微砂混じり粘土ブロック（0.5～3cm）が混在

55．灰黄色（2.5Y6/2）粗砂・砂層に黄灰色（2.5Y6/1）砂混じり粘質シルトが層状に介在し、緑灰色（7.5GY5/1）粘土ブロック（1～4cm）が多量に混在する、流れ込みつつ崩落の状況を呈する
56．灰色（N5/）粘土
57．オリーブ灰色（2.5GY5/1）小礫・礫混じり粘土
58．灰色（N5/）粗砂・砂がラミナを形成、黒褐色（2.5Y3/1）弱粘質シルトがラミナを形成
59．暗灰色（N3/）粗砂・小礫混じり粘土
60．緑灰色（10GY5/1）粗砂・小礫混じり弱粘質土、溝5埋土
61．オリーブ色（5Y5/4）粗砂・小礫層に灰色（5Y5/1）粗砂混じり粘土ブロック（1～3cm）混在、溝5埋土
62．灰色（10Y5/1）粗砂・小礫・礫混じり粘質土、ピット埋土
63．オリーブ色（5Y5/4）粗砂・小礫・礫混じり粘質土
64．オリーブ色（5Y5/4）粗砂・小礫・礫
65．灰色（5Y5/1）砂
66．暗青灰色（10BG4/1）砂礫、非常に硬く締まる

第５図　南壁土層断面図（堤の横断面）



堤3
1．盛土
2．黒褐色（2.5Y3/1）土、現代耕作土
3．黄灰色（2.5Y5/1）粘土
4．にぶい黄褐色（10YR5/3）弱粘土
5．明褐色（7.5YR5/8）粗砂・小礫混じり粘質土ブロック
6．明褐色（7.5YR5/6）粗砂・小礫混じり土
7．明赤褐色（5YR5/8）粘質土、硬く締まる
8．褐灰色（7.5YR5/1）粗砂・小礫・礫混じり粘質土
9．褐灰色（7.5YR5/1）粗砂・小礫・礫
10．黄灰色（2.5Y5/1）粘質土
11．褐灰色（10YR6/1）粗砂・小礫混じり粘土
12．褐灰色（10YR6/1）粘土、若干の粗砂・小礫を含む
13．褐灰色（10YR6/2）粗砂・小礫混じり粘土

堤4
14．褐灰色（10YR5/1）粘土
15．黄褐色（10YR5/6）粗砂・小礫混じり粘質土ブロック（～5cm）、褐灰色（10YR6/1）粗砂・小礫混じり粘質土ブロック（～5cm）、黒褐色（10YR3/1）粗砂・小礫混じり粘質土ブロック（4～20cm）が混在
16．黄褐色（10YR5/8）粗砂・小礫混じり粘質土に褐灰色（10YR6/1）粗砂・小礫混じり粘土ブロックが混在
17．褐灰色（7.5YR6/1）粗砂・小礫混じり粘土に明褐色（7.5YR5/8）粗砂・小礫混じり粘質土ブロック（1～3cm）が混在、南壁47層
18．灰黄褐色（10YR5/2）小礫混じり砂質土
19．褐灰色（7.5YR6/1）粗砂・小礫混じり粘土ブロック（1～4cm）が混在、南壁48層
20．明黄褐色（10YR6/6）砂質土
21．褐灰色（10YR4/1）小礫混じり砂質土に褐灰色（7.5YR5/1）粘が両側から流れ込む
22．暗灰黄色（2.5YR5/2）砂に褐灰色（10YR4/1）粘土ブロックが混在
23．褐灰色（10YR6/1）粘土、黄褐色（10YR5/8）小礫、褐灰色（10YR5/1）砂・粗砂がラミナを形成
24．灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土に褐灰色（10YR5/1）粘土ブロックが崩落する
25．明黄褐色（10YR6/8）砂・粗砂がラミナを形成
26．褐灰色（10YR4/1）砂・粗砂・小礫・礫が混在する崩落土
27．灰色（10Y6/1）粗砂・小礫混じり粘土に灰色（5Y4/1）砂混じり粘土ブロック（1～3cm）が混在、南壁50層
28．明褐色（7.5YR5/8）粗砂・小礫層に褐灰色（7.5YR6/1）粘土ブロックが多く混在
29．灰色（N6/）砂・粗砂・小礫混じり粘土
30．明黄褐色（10YR6/8）粘土
31．暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土
32．オリーブ色（5Y5/4）砂混じり粘土に灰色（5Y5/1）微砂混じり粘土ブロック（0.5～3cm）が混在、南壁54層
33．褐灰色（10YR5/1）粗砂混じり粘土ブロックの集積で、黄褐色（10YR5/6）粗砂・小礫混じり土が混在
34．黄褐色（10YR5/6）粗砂・小礫層に褐灰色（10YR6/1）粘土ブロック（1～4cm）が多く混在
35．黄褐色（10YR5/6）砂礫層
36．褐灰色（10YR5/1）粘土ブロック（5～10cm）と明黄褐色（10YR6/8）粗砂・小礫混じり粘土ブロック（5～10cm）が混在
37．明黄褐色（2.5Y6/8）粗砂・小礫・礫層に黄灰色（2.5Y6/1）粘土ブロック（1～10cm）が多く混在、人為的な埋め戻し土
38．褐灰色（10YR6/1）シルトとにぶい黄色（2.5Y6/4）砂・粗砂と植物遺体がラミナを形成
39．灰色（7.5Y5/1）粗砂・小礫層とオリーブ灰色（10Y5/2）が混在する崩落土
40．褐灰色（10YR5/1）粗砂・小礫混じり粘土
41．黄褐色（10YR5/6）粗砂・小礫混じり土に褐灰色（10YR6/1）粗砂混じり粘土ブロックが混在、5cm未満の礫を多く含む
42．オリーブ色（5Y6/6）粘土に灰色（5Y5/1）粘質シルトのブロック（0.5～10cm）と明黄褐色（2.5Y6/8）粘土ブロックが混在
43．灰色（7.5Y5/1）粗砂・小礫混じり弱粘質シルトに灰色（7.5Y5/1）粘土ブロックが多く混在
44．灰色（7.5Y6/1）粗砂・小礫混じり土に灰色（7.5Y5/1）粘土ブロックが多く混在
45．オリーブ色（5Y5/4）粗砂・小礫・礫混じり粘質土、南壁63層

第６図　東壁土層断面図（堤の縦断面）

ところで堤３－１の池の内側には、幅１m弱の犬走り状の平坦面が形成されており、通路と考えられる。これが部分的な崩壊や堤２築造段階の改変でないことは、同じく堤２にも同じ規模の平坦面があり、しかも堤２の場合、堤として機能していた段階の黒褐色腐食土が堆積していたことから類推できる。なお両堤の平坦面ともに、盛土の過程で形成されたことも確認できる。

堤２　盛土は、黄褐色～橙色系を呈する粘土・粘質土のブロックで、小礫・礫を含み、硬く締まる。地元の老人から、「(老人の父親が）子供の頃に父親から、この堤は西山の裏にある池を拡張した時に生じた土を持ってきて盛って造ったと聞かされている、と聞いた」との教示を受けた。西山とは、調査地の西北西約800mにある羽曳野丘陵東縁部にある地名で、その西側（裏）は南北方向の谷地形を利用した複数の池が連なっている。

堤２はその堤体が堤３堤体斜面に、その基底部が地山の礫層に直接乗っている。築造に先立って、堤３の表面を覆っていたであろう自然の流出土や腐食土を除去したと考えられ、その後に池の内側の幅３m程度を礫層までの堆積土を除去しており、強度を考慮して築造している。盛土は堤３内側に大きな単位で水平に積み上げる。高さ0.6m程度のかさ上げになっているが、堤３の補強の役割が強く、いっきに盛土したと考えられる。

ところで本堤の盛土中には、暗褐色を呈する腐食土４条が薄く層状に介在する（図版２）。この腐食土層は、部分的なものではなく、堤の南北方向の横断面でも、堤３にすりつく部分ではT. P. 56.1m、55.4m、55.1m、54.5m程度で、西方への若干の傾斜をもつ自然に堆積した層序として確認できる。基底部からいっきに盛土をしたにしても、長大な堤を同時に盛り上げていく場合、盛土単位の間にタイムラグが生じ、腐食土が入ったと考えられよう。腐食土をはさんで、上下の土質が異なることもそれを示している。なお基底部付近のT. P. 54.5m以下では、堤３の表面が渦を巻くように崩壊しており、堤２の築造段階には多くの水分を含んでいたことがわかる。ところで堤の内側には、T. P. 56.1m付近で幅0.8m弱の犬走り状の平坦面が形成されている。第５図の17層上に16層を盛る段階に形成された平坦面である。

なお堤裾部にコンクリート擁壁が確認された。堤裾部を垂直に掘削した後に、コンクリート擁壁を築造し、その後に裏込めとして堤２盛土起源の明黄褐色砂礫土と褐灰色粗砂・小礫混じり粘土ブロックを入れて硬く締める。堤１と堤２の間に行われた近年の護岸工事である。

堤１　盛土は、橙色を呈する粘土（第５図の７層）と、その後に池内側の堤体を大きく削りつつ積んだ黄褐色土（同５層）からなる。前者が堤１－２、後者が堤１－１である。

堤１－２の盛土は硬く締まっているが、堤１－１の盛土は礫のほか、コンクリート片や空き缶、ビニール等が含まれ、全く締まりのないものであり、最終的に池内側に長大な木杭を打設しその間に板材を渡して土留めを行っている。堤１の築造は、堤２の表面を覆う腐食土や崩壊土を除去することもなく、軟弱な基礎の上に直接に土盛りした雑な工事である。なお横断面（第６図）の溝１最上部は、堤１段階の排水溝と考えられる。内径20cm程度の土管内には、東から西に流れる状況で引っ掛かったビニール片を確認した。

溝１　堤３・２・１段階を横断する溝である。断面形は逆台形、あるいは「凹」字形を呈し、規模は幅約２ｍ、深さ約１ｍで、堤４中ほどまで掘削する。粘土ブロックの３層は、土管を埋設するもので堤１段階と考えられる。

堤にかかわる遺物（第７図）　遺物量は大変少ない。

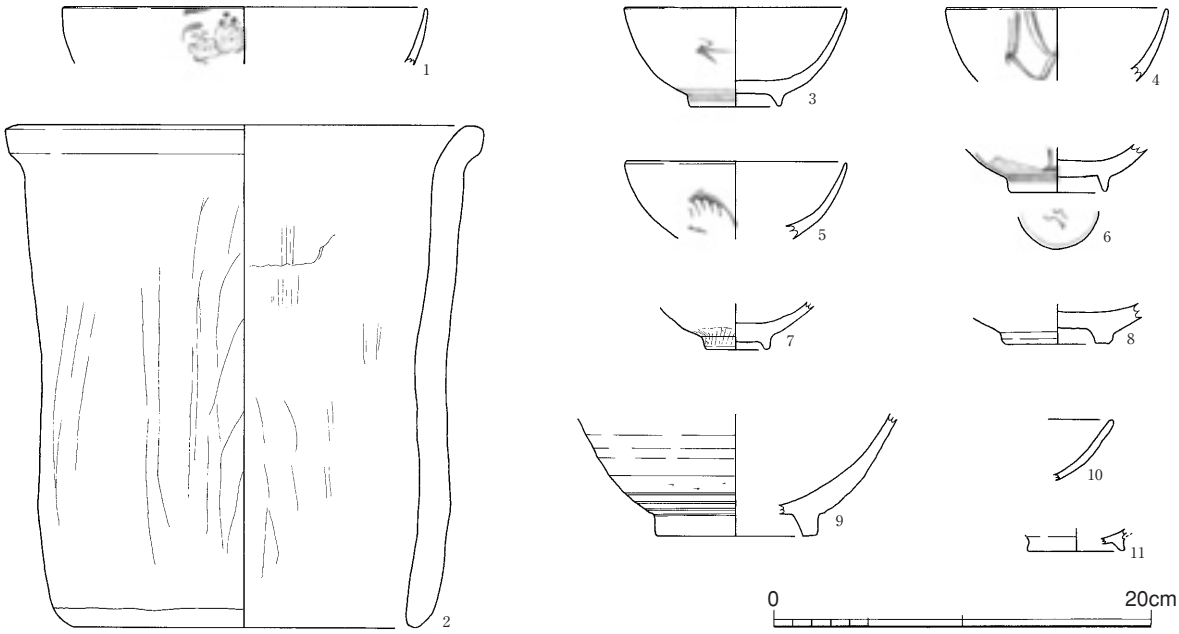
１は堤１にかかわる土管埋設の埋土から出土した。波佐見窯系染付け梅文碗であり、19世紀に位置付けられる。口端部3.4cmの破片なので、口径はやや不正確である。

２は瓦質の土管である。溝１から落ちた水が、堤4を抉る撹乱部分から出土したもので、いずれの段階に埋設されたものかわからない。若干「ハ」字状に開く形態で、同じ形態の土管をすぼまる方向へ水を流し出すように連結するのだろう。外面の残存状況は良好であるに対して、内面は摩滅が著しく不良である。体部外面は、工具による強い縦方向ナデ仕上げ、両端部は工具で横方向に削りとる。体部内面は工具によるナデ仕上げと布圧痕が部分的に残る。他にも数点の瓦質土管片（図版６下）が出土している。

３～８は堤３に関わる遺物である。５が堤４上の撹乱土坑からの出土、他は堤３盛土からの出土である。３は波佐見窯系の染付け松葉文碗で見込み蛇の目釉剥ぎ。４は波佐見窯系の染付け碗で外面に二重網目文。５の波佐見窯系染付け碗は内面に露胎痕跡が確認できる。６は波佐見窯系の染付け碗で華花文。３～６はいずれも18世紀中頃に位置付けられる。７は肥前系陶器碗で見込み蛇の目釉剥ぎ、体部裾から高台にかけて鉄カンナ痕がある。８は肥前系青磁釉碗である。７・８はいずれも18世紀に位置付けられる。

９は唐津系の鉢である。18世紀に位置付けられる。溝１から落ちた水が、堤２・３の基盤を抉る撹乱部分から出土した。

10・11は堤４に関わる遺物である。10は堤４の盛土から出土した和泉型瓦器碗の細片である。内外面とも摩滅しているが、ヨコナデにより口縁部外面のくぼむ状況から、13世紀代に位置付け



第７図　堤関連の出土遺物実測図

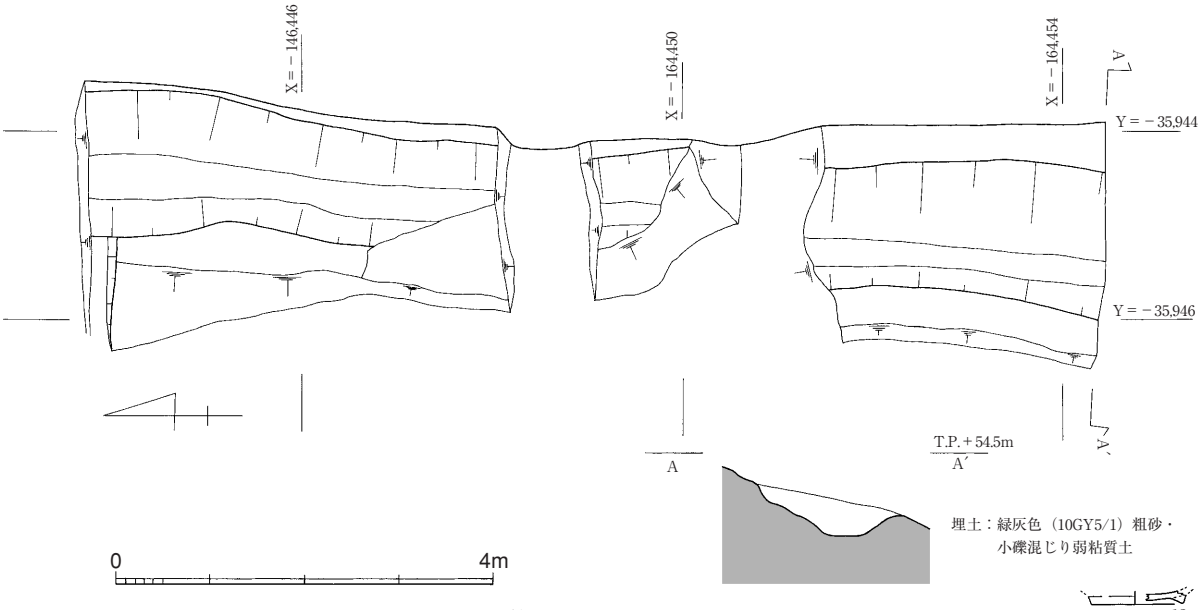
られる。11は溝３の38層シルト・砂・粗砂ラミナから出土した瓦器碗の高台細片である。二次焼成を受けている。高台径は約５cm。13世紀初頭程度に位置付けられる。

第２節　その他の遺構と遺物

ここでは、堤体築造以前の遺構を報告する。堤体を除去した段階で、遺物を含まない地山であるオリーブ色粘質土を確認した。この地山は、調査区東端から西方向に南部で2.5m、北部で3.0mの幅で確認されたもので、西方に向かい急激に落ちており、それよりも西方では下位の礫層が露出する。この地山面の東端の標高は、平成16年度発掘調査地の遺構面（地山面）のT. P. 54.45mとほぼ同じであり、南部での西2.5m地点の標高はT. P. 53.70mである。なお調査区の中ほどで、南北幅3.5～5.0mが撹乱を被るのは、堤を横断する溝１～３の掘削と水流によるものである。地山面で溝状遺構4条を確認した。

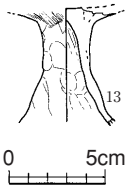
溝４（第４図・図版２下）　堤３盛土の重機掘削段階に、一部を確認した。中央部分は溝１～３の掘削と水流で撹乱を被り残存しないが、調査区の南部と北部で確認できた。堤に平行する方向で掘削された溝で、埋土は灰色粘土である。遺物は出土していない。なお本遺構の直上には、ラミナを形成する土層（39層）が被覆するので、堤３の下部構造ではないと考えられる。

溝５（第８図）　堤体を除去した段階で、西方に向かい急激に傾斜する地山（オリーブ色粘質土）の上面で確認した。中央部分では、堤を横断する溝１～３の掘削と水流による撹乱が著しい。確認したのは、南北方向に掘削された直線溝の約15m分で、南・北ともに調査区外に延びる。規模は



第８図　溝５平面図

幅1.5m程度に復元できる。傾斜変換部分から１m弱西方のやや下がった位置に掘削する。凹凸の激しい斜面地での検出なのでやや正確さに欠けるものの、底面で検討すれば真北よりも東へ５°程度振る方向の直線溝と考えられる。



第９図　溝５出土遺物実測図

出土遺物（第９図）　埋土から黒色土器を含む土器細片が出土するが、図化で

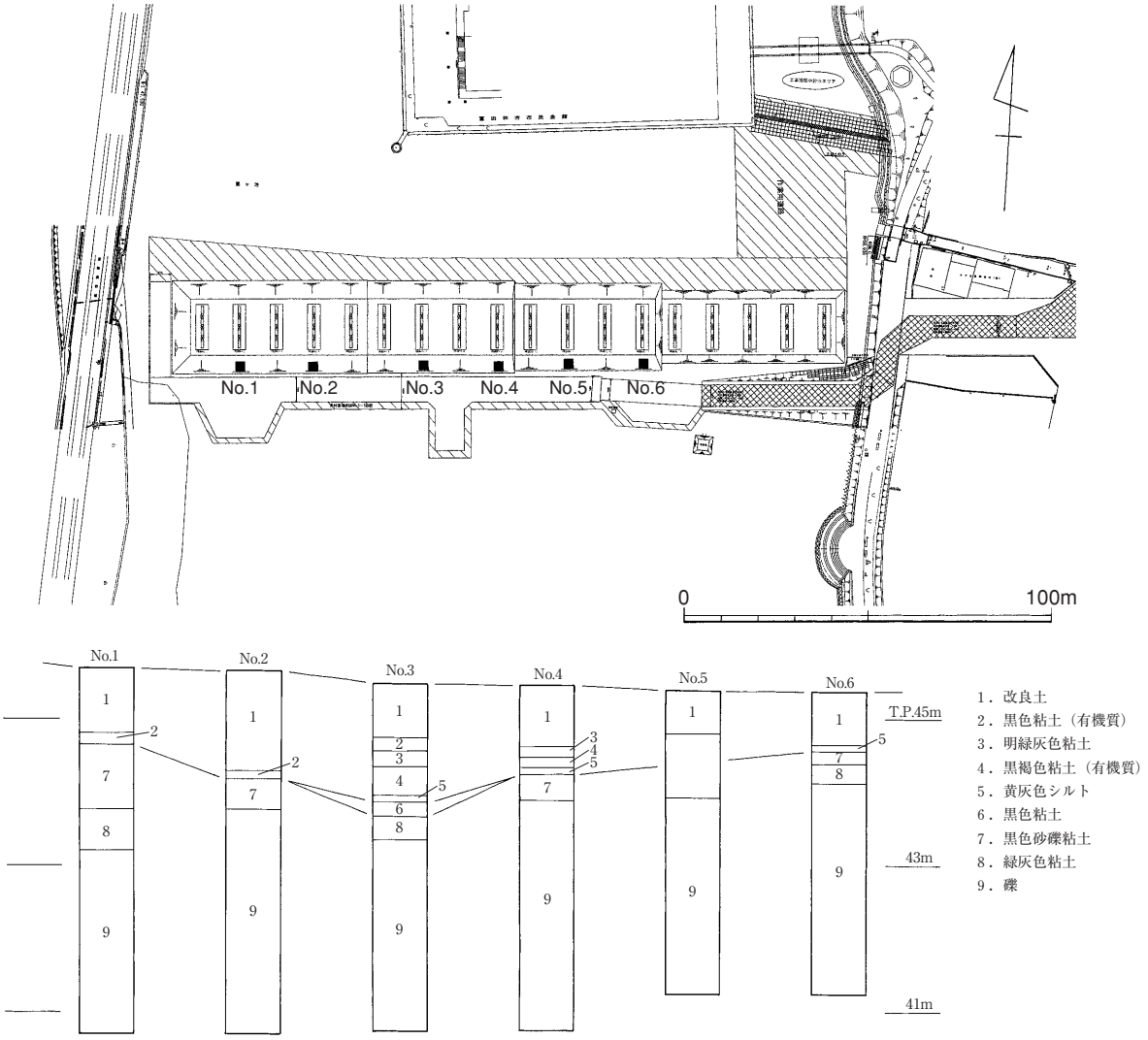
きるものは少ない。

12は瓦器碗底部の細片である。摩滅が著しく調整不明。高台は2.3cmが残存し、高台径は5.0～5.4cmに復原できる。13世紀に位置付けられる。13は溝北端から出土した土師器の高杯である。脚部は外面ナデ仕上げであるが接合痕と爪痕が残り、内面は絞り痕をナデ消す。杯部は剥離する。混入品であろう。

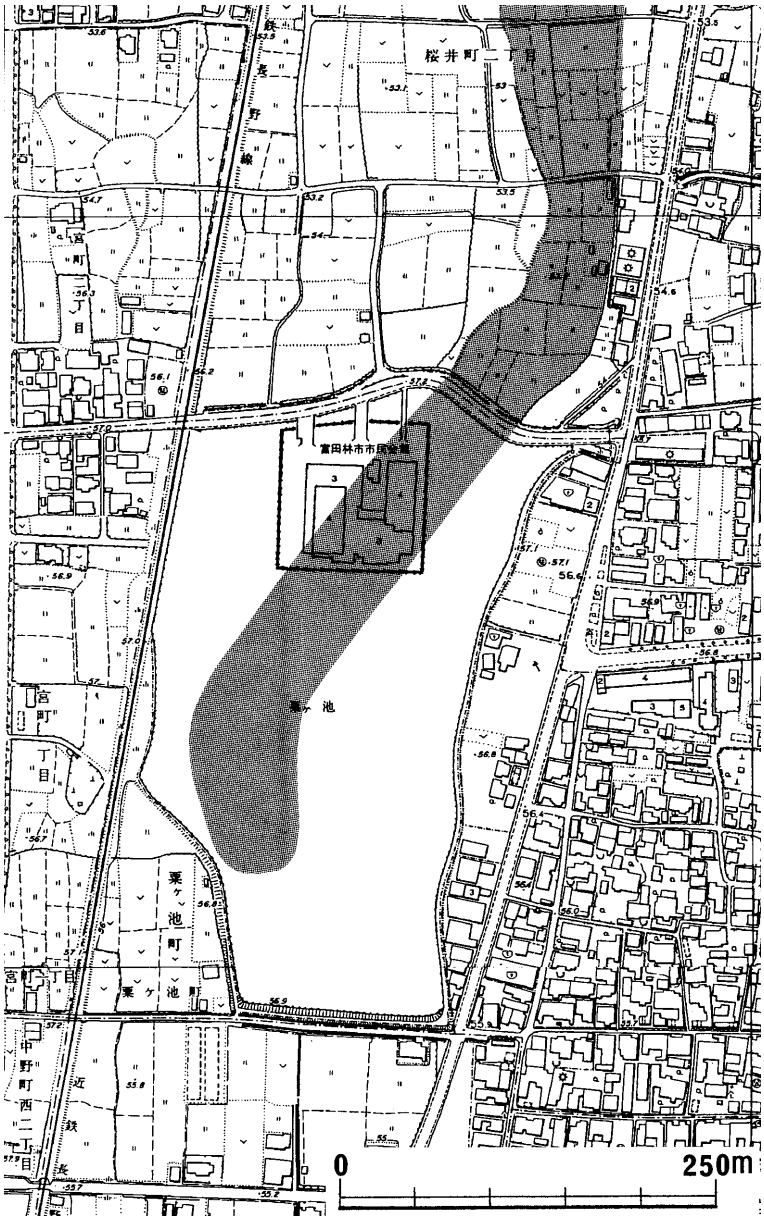
溝６・７（第６図・図版５下）　溝５の埋土を除去した段階で、溝内側の壁面に溝６・７の断面が現れて確認できたものである。いずれも調査区外の東から西方への方向性を有する溝と考えられるが、溝５によって破壊されており、東壁断面と北西隅の地山面に残存した溝６底部を確認したのみである。両者の関係は溝７が古く、溝６が新しい。

第４章　橋梁部の確認調査

確認調査は、調査第二グループ主査　小山田宏一を担当者として、平成18年度事業として実施



第10図　粟ヶ池橋脚部分の土層断面柱状図



第11図　埋没微低地の復元図

した。工事は粟ヶ池内の長さ190m区間（幅16m）に桁受け部18箇所を築造するもので、確認調査では、工事で掘削された法面を観察して、写真撮影および断面図を作成した。18箇所の内6箇所について断面図を作成した。確認調査では遺構・遺物は未確認であるが、調査箇所は河岸段丘上の埋積谷の中を横断するもので、粟ヶ池の築造前の自然地形がうかがえるので重要である。2点が明らかになった。

①7層以下が基盤層で、池の両岸から徐々に深くなり、No.3区で最も深くなる。

②No.3区の最深部のみに黒色粘土の堆積が確認できた。なお、この部分での基盤層上面の標高は、43.68mである。

以上が確認調査の結果であり、No.3区で確認できた最深部の黒色粘土は北東にのびるようである。この埋積谷は、池北東の地割の乱れに残る埋積谷に対応すると考えられる。

次に確認調査の結果と、平成16年度および今回発掘調査の成果を合わせて、埋積谷に向かう地形の状況を示す。その調査地周辺から西方への概要は、南北方向に走る一般国道（旧）170号部分の標高が最も高く、西方に向かって徐々に低くなり、今回調査地部分から急激に低くなるものである。道路部分での地山面の正確な標高はわからないが、そこから西方約10mの平成16年度調査地東端の地山面は54.90mなので、55.00m程度と考えられる。平成16年度調査区西端の標高は54.35mで、西方に向かい約50mで0.65m程度低くなっている。そして今回調査区では、東端から西方4mの間に地形変換点があり53.15mへと急激に低くなり、それ以西は緩やかな傾斜となり調査区西端で52.7m、さらに120m西方のNo.3区で43.68mに至る。

第５章　まとめ

調査成果は２点に大別できる。まず東側隣接地における平成16年度調査箇所から西側に連続する遺構面の状況と旧地形を確認した事、次に粟ヶ池堤の築造過程を確認した事である。詳細は第３章で報告したが、ここではその概要を記載しつつ若干の考察を加えてまとめとする。

第１節　平成16年度調査との関連

前回の発掘調査では、２層の遺物包含層とその下に遺構面1面が確認されている。遺物包含層の時期は、古代末～中世（②層）と奈良時代（③層）である。また遺構面では、古墳時代後期～終末期の小方墳１基の他、飛鳥～奈良時代の土坑墓と推定される土坑、奈良時代の南北溝１条と合わせ口甕棺１基等が見つかっている。奈良時代の南北溝については、真北の方向なので、条里地割との関連が示唆されている。また時期は不明ながら、多数の土坑が検出されている。なお古代末～中世の水田・畑跡も確認されているので、ここが古代末以降には耕作地として土地利用されたことも確認できる。

今回の調査では、前回調査から連続する遺構面は確認できたが、２層の遺物包含層は存在しない。またその遺構面は、急激に西に向かって傾斜して東側数ｍで途切れ、それ以西は下部の礫層のみになる。遺構としては溝4条が確認できたのみで、古墳時代の古墳、飛鳥～奈良時代の土坑墓や土器棺からなる墓域が連続する状況はない。また前回のような多数の土坑も存在しない。それは今回の地点が、西側の谷への地形変換点に相当することに起因するのだろう。見つかった溝４条については、溝５が13世紀代に位置付けられる以外は時期を確定できなかった。

第２節　粟ヶ池の堤

前回調査では、粟ヶ池の堤および関連する遺構は未確認だが、今回調査では４段階の堤を確認した。そして各段階の堤は、数回の改修あるいはかさ上げされたことも報告の通りである。古い段階の堤から順番に、関連する遺構とともにまとめると以下のとおりである。

堤４　堤を横断する溝と盛土の土質の違いから、少なくとも３回の改修・かさ上げが確認できる。

①堤４－３　西の谷地形に向かう傾斜変換点をまたいで築造される。堤の東半分は地山面上、西半分は傾斜面上に盛土する。盛土の高さは20cm以上であるにしても非常に小規模である。堤体の標高は、大部分が東の調査区外なので明らかでなく、T. P. 54.7m以上である。溝3は堤を横断して掘削され、東の生産域に供給された用水の余水を池に流し込む溝である。溝埋土の上層がブロック土であることは、堤４－２の改修・かさ上げで埋め立てたからであろう。なお溝中層から出土した瓦器碗細片によって、13世紀に堤が築造されたと考えられる。

②堤４－２　本堤は、堤４－３の池内側に拡張するもので、高さ50cm程度の改修・かさ上げを

行う。また盛土は灰色系を呈する粘土で堤４－３と類似する。横断面（第６図）33層は本段階の盛土なので、堤体の標高はT. P. 55.2m以上である。溝２は堤を横断するもので、溝３の機能を引き継いだと考えられる。

③堤４－１　本堤は、堤４－２の上面に30cm程度の改修・かさ上げを行う。盛土は黄褐色系を呈する粘質土（46層～49層）で堤４－２と全く異なる。堤体の標高はT. P. 55.5m程度である。堤を横断する溝は、調査区内に確認できず、調査範囲外に移動したのかもしれない。

堤３　縦・横断面の土質の違いから、少なくとも2回の改修・かさ上げが確認できる。

①堤３－２　本堤は、堤４－３の池内側に拡張するもので、高さ30cm程度の改修・かさ上げを行う。盛土は縦断面の33・34層、横断面の４・５・10層が本段階の上部層であり、黄褐色系の粘質土である。堤体の標高はT. P. 55.8m程度である。

②堤３－１　本堤は、堤３－２の池内側に大きく拡張するもので、高さ70cm程度の改修・かさ上げを行う。盛土は褐灰色～灰褐色系の非常に硬く締まる良質な粘土で、これまでにない大規模な工事を行い、巨大な堤に造り替える。堤体の標高はT. P. 56.5m程度である。また池内側には盛土の過程で幅１m程度の犬走り状の平坦面を造っており、通路と考えられる。なお盛土内から18世紀中頃の陶磁器の破損品がまとまって出土しており、築造時期を示すと考えられる。

堤２　盛土に改修・かさ上げは認められない。堤裾部にコンクリート擁壁を設置した段階を堤２－１とする。

①堤２－２　本堤は、堤３－１の池内側に拡張するもので、高さ60cm弱程度の改修・かさ上げを行う。作業工程は、まず堤３－１池内側斜面の堆積土を除去し、堤裾は地山礫層まで露出させて基盤を強固にし、その後に盛土を行う。盛土は、黄褐色～橙色系を呈する粘土・粘質土ブロックで、大きな単位で水平に積み上げる。堤体の標高はT. P. 57.05m程度である。また池内側には盛土の過程で幅0.8m程度の犬走り状の平坦面を造る。

②堤２－１　堤裾部にコンクリート擁壁を巡らせる近年の護岸工事である。

堤１　土質の違いから、2回の改修が確認できる。

①堤１－２　本堤は、堤２－２の池内側に拡張するもので、かさ上げは行わない。工事は堤２－２池内側斜面の堆積土を除去することなく行う。

②堤１－１　本堤は、堤１－２の池内側に拡張するもので、かさ上げは行わない。堤１－２の池内側堤体を大きく削りつつ積んだ黄褐色土からなる。最後に堤体上面を整地しており、標高はT. P. 57.25m程度になる。大阪府によって実施されたオアシス事業によるものである。

今回の調査において、堤4－3が最も古い段階のものである。しかしこの堤の築造時期が、粟ヶ池の築造時期を示すわけではなく、粟ヶ池の築造は堤４－３段階以前と考えなければならない。なぜなら粟ヶ池は、北方向に開く谷地形を利用して、その両側の高まりをつなぐ東西方向の堤を築いて水をせき止めて築造したからだ。つまり水面が低ければ、今回の南北方向の堤は築堤する必要のない箇所だからである。当初の東西堤を改修・かさ上げして、粟ヶ池の規模が大きくなっ

て水位が上昇したことで、池東側の南北方向の堤が築造されたであろうことは、堤４－３築造以前の堆積土である55・58層に流水を示すラミナの形成が確認できることからも想定できる。また55・58層が覆う溝５埋土から瓦器が出土しているが、池の水面がより低い段階が想定できるのであれば、その遺物も築造時期の上限を示していないことも付け加えておきたい。

ところで、現在の粟ヶ池の北堤は、富田林市民会館の北をはしる式内社美具久留御魂神社の参道である。そしてこの参道は、不思議なことに中央部で「く」字状に強く屈曲しているのである。その理由を考える上で、第11図に示したように、微低地と直角に交わることは重要であると考える。おそらく、この微低地と直角に交わる70m程が最初期の北堤の痕跡ではないかと考えられる。池を拡大した段階に、新たな堤をこの位置に築造したのならば、微低地部分だけを屈曲させる必要はないのではなかろうか。堤北側の水田は、西半が微低地よりかなり高くなっており、現在の標高53mと54mの等高線に現れている。そして54mの等高線は、粟ヶ池築造以前には、現在の池内を微低地の西と東の両側に沿ってはしり南のいずれかで結合し、また東の等高線は粟ヶ池北東隅あたりで微高地に結合するものである。つまり現在の標高54mの等高線で想定できる小さな谷地形を直角にせきとめたのが、当初の粟ヶ池と考えておきたい。いずれにしても、粟ヶ池築造当初の堤はこの参道の下に埋没している可能性が高く、その変遷や築造時期については将来の調査に期待しておきたい。

写 真 図 版

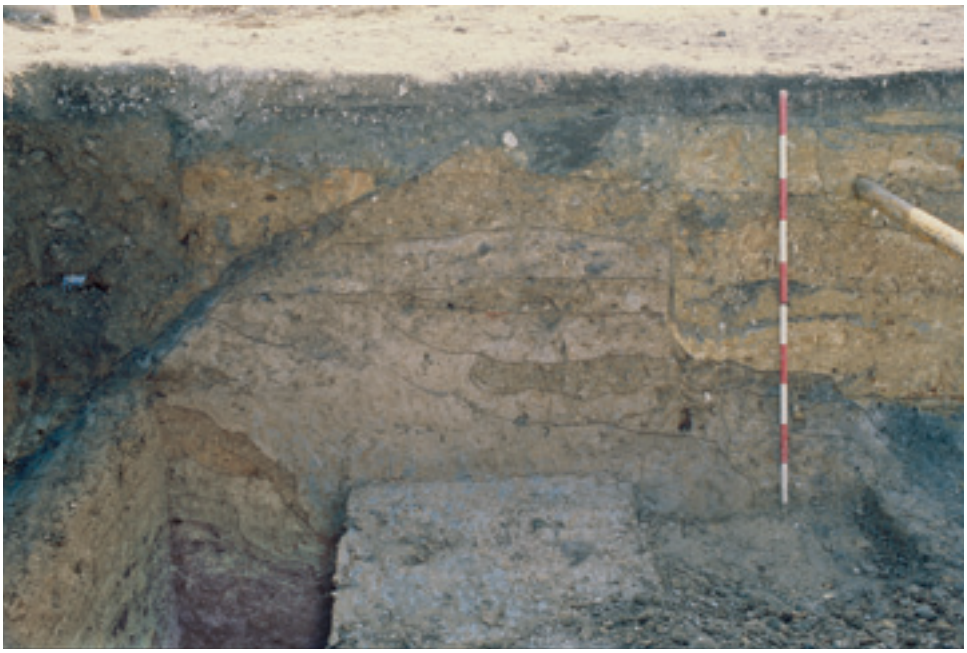
図版1　調査地遠景

東上空から見た調査地（平成16年撮影）

北上空から見た調査地（平成16年撮影）

図版2　堤南壁断面

堤１・２・３の上半断面（北東から）



堤３の上半断面（北から）

堤２の下半断面（北から）

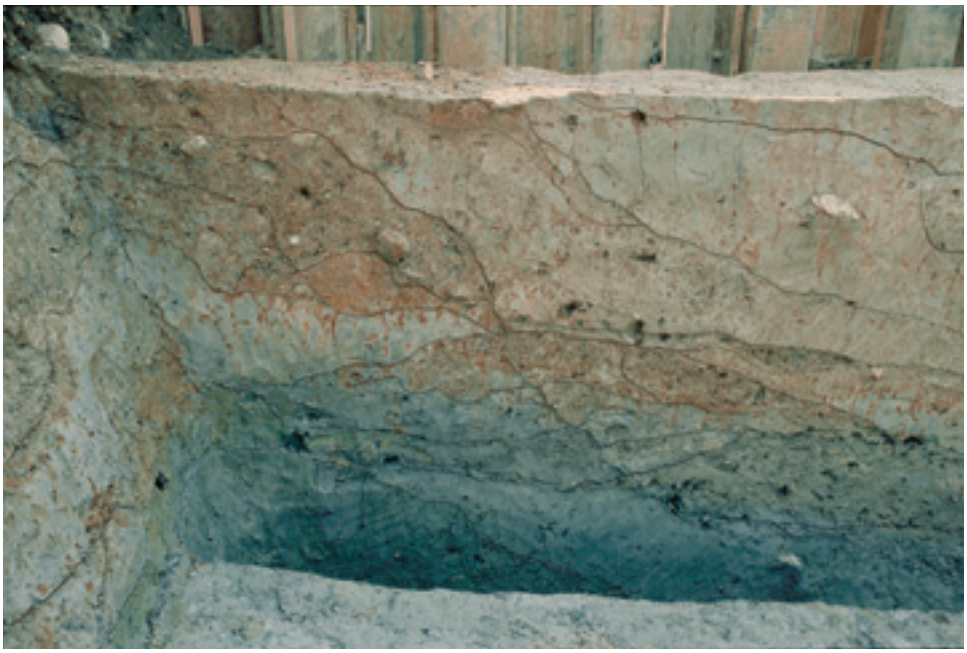
図版3　堤4検出状況

堤4の全景（西から）

堤4の全景（北から）

堤4の全景（南から）

堤４の南壁断面（北西から）

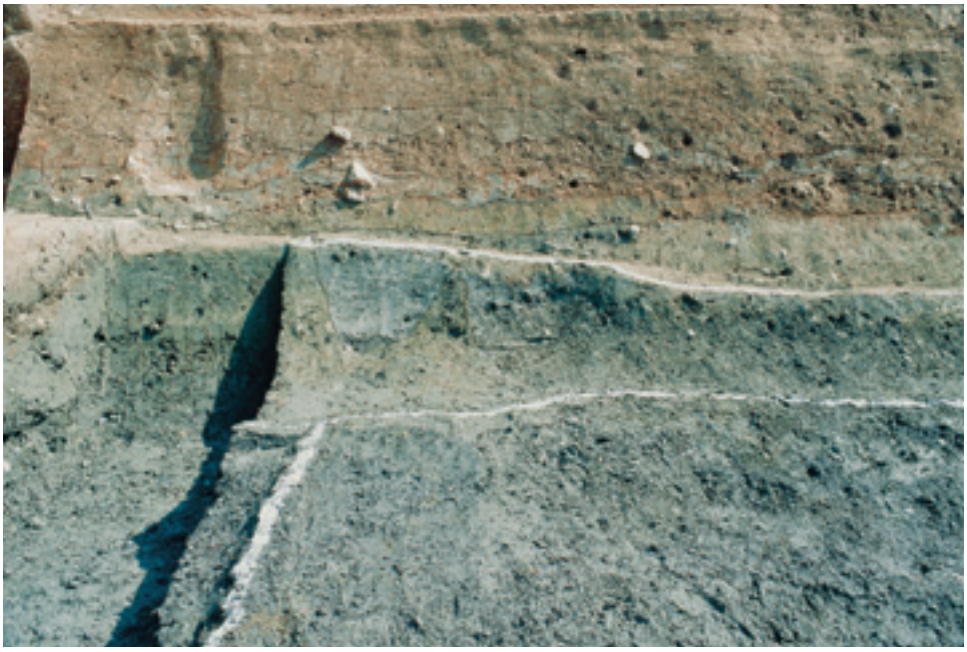


堤４の南壁断面（北から）

溝１・２・３の東壁断面（西から）

溝５の掘削状況（北西から）

溝５の南壁断面（北から）



溝６・７の確認状況（西から）

堤・下層遺構関連遺物

堤関連遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	なかのきたいせきに
書 名	中 野 北 遺 跡 Ⅱ
副 書 名	主要地方道美原太子線道路整備工事に伴う発掘調査
巻 次	
シ リ ー ズ 名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2010－6
編 集 著 者 名	山田隆一
編 集 機 関	大阪府教育委員会
所 在 地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前2丁目　TEL 06－6941－0351（代表）
発 行 年 月 日	平成23年１月31日

ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかのきたいせき 中 野 北 遺 跡	おおさかふとんだばやしし 大阪府富田林市 あわがいけちょうほか 粟ヶ池町他	27214	15	34° 31′ 1″	135° 36′ 30″	平成22年1月18日～ 平成22年2月25日	180㎡	主要地方道美原太子線道路整備工事

所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
なかのきたいせき 中 野 北 遺 跡	池	中世～現代	堤、溝	陶磁器、瓦器、土師器	

要 約	中世から現代にいたる粟ヶ池東堤を確認した。 また、中世の溝も確認した。

大阪府埋蔵文化財調査報告2010－6

中 野 北 遺 跡 Ⅱ

―主要地方道美原太子線道路整備工事に伴う発掘調査―

発　行　大阪府教育委員会
〒540-8571　大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

発行日　平成23年１月31日

印　刷　株式会社中島弘文堂印刷所
〒537－0002　大阪市東成区深江南２丁目６番８号